

はじめに

日本がなぜあの戦争を始め、国を滅ぼすまでの敗北に至ったのか。戦後七〇年余りが過ぎた今、私たちはその史実を、様々な記録から詳細に知ることができる。しかし、その七〇年余りの間に日本がどのような歩みを進めてきたのかという、私たちの現在にまさに直結する、近過去、いわゆる現代史について、くわしく知ることは難しい。なぜならば、現在に近づくほど資料が整理されていない、あるいは、現在の政治の機微に触れるといった様々な理由から、まだ公開されていない資料が多数残されているためである。

沖縄の返還の歴史も、そんな知られざる現代史の一つだった。太平洋戦争末期にアメリカによって奪われた沖縄は、一九七二年、佐藤栄作政権の下、外交交渉によって平和裏に日本に返還された。しかし、その詳細は長い間、公にされることがなかった。

その状況を大きく変えたのが、二〇一〇年の民主党政権時に岡田克也外務大臣の指示で行われた、「いわゆる「密約」問題に関する調査」である。有事の際の核兵器の再持ち込みに関する「密約」や、原状回復補償費の肩代わりに関する「密約」などの調査が行われ、沖縄返還関連の膨大な外交記録が公開された。その他にも、核再持ち込み「密約」の原本が二〇〇九年に佐藤家から見つかったこと、さらに佐藤栄作の首席秘書官だった楠田實（みさる）が残した膨大な総理官邸の資料（楠田實資料）が見つかった



ワシントンの日本大使館とつなぐ“ホットライン”で話す千葉一夫

たことなどもあわせて、沖縄返還に至るまでの全体像が、初めて明らかになったのである。

当時の外交記録や官邸資料を読み進めると、そこには「千葉一夫」という名前が頻繁に出てくることに気がつく。沖縄返還交渉当時、外務省の主管部署だった北米局（一九六八年にアメリカ局と名称変更）北米第一課の課長を務めた人物である。千葉は、ワシントンの在米日本大使館に勤務した三年と、北米第一課長を務めた四年とを合わせた七年余りもの間、沖縄返還交渉に携わった。全交渉を通じて、これほど長く担当した外務官僚は他にはいない。関係資料が明らかになるにつれて、千葉一夫が沖縄返還で果たした役割の大きさが浮き彫りになっていった。

取材を重ねていくと、現在も生存する関係者からは、「千葉がいなければ、沖縄は今のような姿で日本に返還されていなかったかもしれない」という言葉を多く聞いた。

人一倍頭の回転の速い「帰国子女」で、アメリカの外交官が舌を巻くほど英語が飛びきりうまく、部下からは「鬼」と恐れられた。その一方で、いわゆるエリート外務官僚のイメージに収まらない、人間味あふれる人物であったことも分かっていた。足繁く沖縄に通って土地の言葉も歌も習得し、人々と酒を酌み交わし、身も心も捧げるほど沖縄をこよなく愛した。

その背景には、千葉自身の戦争体験から来る、沖繩への深いシンパシーがあった。

戦後間もない頃、千葉は妻の恵子に対して、「自分が外務省に入ったら一つだけやりたいことがある。それは沖繩だ。僕は沖繩を取り戻したい」と語ったという。千葉はその言葉通り、沖繩の返還を成し遂げた。

戦中派としての体験を背負った一人の日本人が、戦後の荒廃の中で外交官となり、敗戦後のナシヨナリズムをバネにどのような外交を進めたのか。その詳細を探ることで、当時戦争を体験した誰もが抱いた戦後の価値観や時代思潮も見えてくるように思う。それは、冷戦終結後三〇年近く経った現在、見えにくくなっている価値観でもあるだろう。

千葉は終生黒衣くろいに徹し、自らの仕事について語ることはほとんどなかった。それは、沖繩が未解決の問題を多く抱えており、自らの発言が政治的な意味を持つてしまうことを恐れたためでもあろう。その職業倫理に敬意を表したい一方で、これだけの仕事をした人物の人生が十分に語られずに、人々の記憶に留まることなく、時間と共に消えていくのは忍びない。ここに記録として留めるゆえんである。

目次

はじめに

序章

“鬼”と呼ばれた男

鬼の千葉／怖い父／沖繩とアメリカ——それぞれの千葉一夫／「最大の功
労者」——沖繩とアメリカの狭間に立って

1

第一章

戦争の影を背負って——一九四五年・沖繩戦と原爆

9

戦争体験という大きな傷痕／帰国子女／両親と離れて／志願して海軍
へ／助けを求める叫びを耳にして／原爆体験／両親の死

第二章

「僕は沖繩を取り戻したい」——外務省入省……………27

父と同じ外交官の道へ／外務省「二三年組」／妻・恵子との出会い／
「僕は沖繩を取り戻したい」／結婚のためのアメリカ留学／留学中に体
験した^レ和解、日本の独立、沖繩の^レ分離^ク

第三章

「ポトマック川を渡れ」——在米大使館にて……………43

転機——病氣、結婚、そしてワシントン／「ポトマック川を渡れ」／沖繩返
還を初めて主張／佐藤内閣の発足と沖繩訪問／アメリカの姿勢／「戦後
を終わらせたい」／軍部とのパイプづくり——恵子のサポートの下で／部
下から見た千葉一夫／事前協議制度——日米安保の根幹／「基地の自由
使用」を認めるべきか——特別協定をめぐる外務省内の対立／交渉のスタ
ート

第四章

北米第一課長就任——屋良朝苗主席との出会い……………65

北米第一課長に就任——初めての沖繩行き／沖繩で初めての民主的選挙

第五章

——主席公選／大森義夫の「政経情報」／屋良主席の誕生／千葉の鋭い見通し／チーム結成と「核抜き・本土並み」という選択肢／小笠原諸島の返還交渉／ハルペリンの教え／屋良との出会い／千葉と屋良——
狭間での「共闘関係」／沖繩を理解する／恵子との生活

“核抜き・本土並み”は可能か——返還のシナリオを描く……91

アメリカ側の感触を探る——「千葉北米課長帰朝報告」／「核より戦闘作戦行動の自由の方に重点」／楠田秘書官が記した千葉の言葉／「核」と「基地の自由使用」——腹をくぐる日本側／日本側から投げた案／「とも」にガンバロウ」／「ベトナムは駄目だよ」／密約への考え方／帰国後すぐに沖繩の屋良のもとへ／地位協定について問題提起／「下田フォーミュラ」／「朝鮮議事録」／「返還近し」、しかし「基地撤去はダメだ」／玉虫色の解決策／表現の攻防／沖繩への対応／「返還めど後がむしろつらい」

第六章

佐藤・ニクソン共同声明

——返還「大枠合意」の舞台裏

対国会——楠田を押し切る／*Foreign Affairs*への異例の寄稿／最後に残されていた秘密協定／外務省がひそかに用意していた妥協案「会谈録」／追加された「NPT署名」への要求／核密約——ついに入った「好意的回答」という文言／「表」と「裏」の交渉人——千葉一夫と若泉敬／歴史的瞬間に／千葉と屋良は何を語りあったのか

第七章

屋良との約束——“基地縮小”の模索

薄れていく世間の関心／ストライキをめぐる対立／スト決行／「基地」と「地位協定」を議論の俎上にあげようとした千葉／屋良に釘を刺す／再び地位協定を取り上げる／中曽根防衛庁長官の揺さぶり／佐藤行雄とシユミツツ書記官／「沖繩が返還されてからが大変だぞ」／「七〇%前後」という目標／「独り言」／基地をくまなく視察／佐藤行雄への指示／千葉の「目玉商品」／膠着状態／追い詰められる千葉たち

第八章

返還協定の締結——残された課題

那覇空港をめぐって／ガス抜きと牽制／基地の整理縮小への三つの道のり／環境の変化——吉野文六との対立／人の心を打つ名文——屋良の要請文／二〇〇〇万ドル／調印——長い一日／仕事の手は緩めず／最後の沖縄訪問／伊江島へ／P3残留／モスクワ転任と西山事件／「沖縄の人たちのしあわせを心から祈ります」

第九章

「沖縄は変わった、しかし、沖縄は変わらない」

——晩年

「沖縄の次」——モスクワとアトランタ／コースから外れて／アフリカとスリランカ／駐英大使——最後のキャリア／尽きぬ沖縄への思い／「沖縄は変わった、しかし、沖縄は変わらない」／「結局仕事ばかりしてた」

おわりに

序章

“鬼”と呼ばれた男

鬼の千葉

一九六七年一月二二日、外務省五階（のちに七階）のフロアにある北米局北米課に、新たな課長が就任することとなった。ワシントンの在米日本大使館で一等書記官としての任務を終えた、千葉一夫である。このとき、千葉は四二歳。一月に行われた佐藤栄作総理大臣とアメリカのジョンソン大統領との首脳会談で、沖繩返還の具体的な交渉を始めることが決まったため、外務省は全省体制で取り組むことになったのである。

北米課（のちに北米第一課に改称）の部屋には、六人ほどの沖繩班の机と八人ほどの総務班の机が集まった。島が あった。千葉の机はそれらの島から離れた、窓を背にした位置に置かれ、身長一八〇センチ近い巨漢が、そこに陣取っていた。

窓には沖繩の地図が貼り出されていた。千葉は、ふだんはキャビネットで囲まれた空間の中にいて、自分が在室しているかどうか分からないようにしていたという。当時は、外務省を取材する記者が、北米課の廊下まで来ることができたからだった（この状況は一九九一年の湾岸戦争の頃まで変わらず、当時



1970～71年頃の北米第一課。中央奥、沖縄の地図の前で電話するのが千葉一夫。左から竹元正美(のちウルグアイ大使)、法眼健作(のち国連事務次長)、小田野展丈(現・東宮大夫)、有地一昭(のちネパール大使)、千葉の左隣は佐藤嘉恭(のち中国大使)、右隣は加藤良三(のちアメリカ大使)、右から古田保、安藤裕康(のちイタリア大使)

の課長は、自分が在室しているとカムフラージュするために、自分の椅子に上着をかけたままにして、アメリカに行っていたという話もある。

千葉はここで、「鬼の千葉」と呼ばれていた。当時の部下や後輩職員の記憶から、千葉の姿を再現してみよう。

頭の回転が速く、たいていの場合は人が一つのことを考える間に、一〇も二〇もの考えを思いついた。緻密で博識、何でもよく知っている。頭の回転が速いだけに、気が短く、よく怒鳴る。しかし言っていることは正しいので、ぐうの音も出ない。

ただ細かいだけでなく、やることも豪胆だった。朝が早いかわりに、夜は八時にもなると部屋からいなくなり、外務省の近くにあった赤坂の料亭でよく酒を飲んだ。酒に強く、前の晩にどんなに深酒しても、誰よりも早く出勤し、その日やるべきことをメモにまとめ、部下に指示を出した。メモは寝るときに枕元に用意して、寝ている間も気がついたことを書き記した。激務のため次第に自分でメモをする時間も惜しむようになると、朝トイレの中で、当時売り出されて間もないポータブルのカセットテープレコーダーに指示を吹き込んだ。登庁した一年生職員にテープ起こしをさせ、それを「訓

令」として部下に伝えるためだ。

しかし、部下に厳しただけではなかった。昼間は叱咤していた部下のことを、本人のいない夜の酒の場で静かに褒めることも多かった。能力が高くなくても、一生懸命仕事に取り組む部下を買った。逆に、手を抜いたりする部下には容赦なかった。

怖い父

アメリカから帰国した千葉の家族は、東京の公務員住宅に住んだ。妻・恵子三九歳、長女・みどり一一歳、長男・明八歳。

恵子は、戦後間もなくアメリカに留学した経験を持つ、聡明な女性だった。英語ができたため、一夫の仕事にあわせてアメリカに行く前は、外資系商社の社長秘書を務めていた。出費の多い外交官の家計を支えていたが、この帰国以降、共働きをすることはなかった。激務になる一夫のこと、子どもが大きくなることを考え、共働きを諦めたのだろうと思われる。

家族にとっても、千葉は怖い存在だった。休日も家で仕事をしている一夫に、子どもがうるさいと怒鳴られ、恵子は子どもたちを外に連れ出すこともあった。

たまに一夫が子どもの相手をしたといっても、横須賀にある戦艦三笠を見にいったり、沖縄戦をリアルに描いた映画『激動の昭和史 沖縄決戦』岡本喜八監督、一九七一年公開に連れていったりした。沖縄戦の悲惨な現実を伝えるレベルの高い映画ではあるが、初めて映画館に連れていかれた小学生には、強烈すぎるシーンが満載だった。

夜も家の中に、一夫が電話で部下を怒鳴る声が鳴り響いた。あまりにその声がうるさいので、隣の部屋の住人がベッドの位置を変えるほどだった。「俺が部下を怒鳴っている間は、まだそのことを買っているんだ、怒鳴らなくなったら終わりだ」と言っていたという。

仕事に夢中になる反面、お金には無頓着だった。書類と一緒にゴミを捨てると、近所の人に、「お金が落ちていましたよ」と言われたこともあった。書類と一緒に誤って紙幣も破って捨てていたらしい。

沖繩とアメリカ——それぞれの千葉一夫

千葉は、北米課長時代（一九六九年一月から「北米第一課長」に名称変更）の四年間、身も心も沖繩にのめりこんだ。沖繩への出張は一五回にも及んだ。出張から帰るたびに、沖繩民謡のレコード、紅型の飾りなどを買ってきたため、家中が沖繩のものであふれかえったという。

朝、ひげを剃るときには、当時沖繩で新民謡として流行していたフォークスターズの歌を歌っていた。歌が聞こえると、父親が上機嫌だと分かり、家族はほっと胸をなで下ろした。

ウチナーグチと言われる沖繩の言葉まで習得した。沖繩を訪ねた際には、ウチナーグチで下ネタを言っ、地元の人たちを笑わせた。千葉のお色気話で、東京から来た硬い外務官僚というイメージは消え去り、地元の人たちとの酒の場は和んだ。外務省の上司は、千葉のことを「沖繩化した」と言っていた。

千葉は、交渉相手のアメリカ人たちにも、強烈な印象を与えていたようだ。あるとき、ワシントン



那覇の料亭「左馬」にて。琉球舞踊など沖縄の
伝統芸能が伝わる老舗だった。右から3人目が
千葉一夫

の国務省を訪れた千葉が、打ち合わせをして部屋から出ていった後、残されたアメリカ側の高官は一言つぶやいた。

「いま出ていった男は、われわれの誰よりも立派な英語を話すな。」

千葉の英語は、極めて明瞭で正確なイギリス英語であった。それも早口だったらしく、豊富な語彙を駆使して機関銃のように言葉を繰り出したという。

家族や部下には厳しいのに、パーティーの場での会話は冗談やウィットに富み、三〇秒も千葉と一緒にいると、周囲に思わず笑いがこぼれてしまうという座談の名手だった。

一方で、交渉の場での千葉は、痛烈な皮肉も交えた「フ・ネゴシエーター」であった。そんな「カズ・チバ」に、アメリカの外交官の中には敬遠する者もいたが、密かに畏敬の念を抱く者もいたという。

「最大の功労者」——沖縄とアメリカの狭間に立って

そんな千葉が四年間の課長時代に手がけた作業は膨大なものだ。千葉のことを、「沖縄返還の最大の功労者だ」と語る同僚も少なくない。

一九六八年一月から沖縄に通い始め、秋には早くも翌六



中央左端は千葉の千葉一夫、右隣は東郷郷長、東郷郷長が右隣の右隣がマーシャル・グリーン次官補、千葉の左隣の左隣が通訳を務めたトム・ウィッケル

警察などすべての関連する省庁の部署が束ねられ、アメリカとの間で細かな交渉が進んでいった。そして一九七一年六月、千葉は、沖縄返還協定の締結にまでこぎ着け、翌七二年五月一日、沖縄返還が実現する。

この間の最大の問題は、言うまでもなく、基地問題だった。当時、沖縄にアメリカの核兵器が配備されていたことは、公然の秘密だった。だからこそ地元の住民は、日本に復帰するにあたって、核の

九年一月までに佐藤総理とニクソン大統領の首脳会談が開かれることを予見してスケジュールを作った。実際にもその通りにことが進んだ。すべては、千葉の働きかけにより、日本のイニシアチブで作られたスケジュールだ。この首脳会談で日米共同声明が作られ、七二年までの沖縄返還の大枠合意が決まる。

しかし、どのような形で沖縄が返還されるかは、決まっていなかった。二七年間、アメリカの統治下に置かれ、社会の仕組みがすべてアメリカになっていたものを、根底から日本に変えていかなければならなかったのだ。小さな国を一つまると、日本の法制度の中に組み込むようなものである。千葉の北米第一課の下に、通産、司法、



晩年の千葉一夫と妻・恵子。沖縄旅行にて

撤去を強く求めていた。また佐藤政権も、世論に押される形で非核三原則を掲げていた。そのため、核付きのままでの返還は政治的に受け入れられないことだった。また当時は、ベトナム戦争においてアメリカが苦戦を強いられていた時期でもあり、基地の撤去を強く求める沖縄と、基地の維持を強く求めるアメリカとの間で、外務省は難しい立場に置かれていた。

一九六九年の首脳会談で、日本側が求める核抜きの方針は決まったものの、東アジアにおける在日米軍基地の重要性が再確認された。どこまでの基地を残し、どこを整理・縮小できるのか。七二年の返還までに、アメリカとの間で熾烈な交渉が続けられた。

千葉は、どの局面においても、現場の交渉の責任者として立ち会った。そして、常に、アメリカとの交渉だけではなく、沖縄の声にも耳を傾けていた。この点において、千葉の特徴は際立っている。

外務官僚としては、「外交は国の専権事項」と言っ、沖縄の声をそこまで聞く必要はないはずだった。しかし千葉は、交渉の過程で沖縄の県知事にあたる行政主席・屋良朝苗やらのあさなほと個人的な関係を築き、屋良にノウハウの交渉の内容を伝えていた。そして、基地の撤去を求める屋良に伝えるべく、基地の整理・縮小に最後まで尽力した。それでも、基地を手放すまいとするアメリカの、特に軍部の姿勢は硬かった。

当時も、「アメリカにもっと譲歩すれば、沖縄はもっと早く、簡単に返してもらえ」という声があった。それは、沖縄を日本の法律の「例外扱い」にして、アメリカが望むように基地を自由に使うのを認めることを意味した。

しかし千葉は、戦後の民主主義的価値観からも、そしておそらく素朴なナシヨナリストとしての立場からも、そのようなことを認めることはできなかった。そして、沖縄をあくまで本土と平等に扱おうとし、できるだけ沖縄の立場に立ちながら交渉を進めるといふ、難しい道を選んだ。

なぜ千葉は、そこまで沖縄にこだわったのか。

そのルーツは、千葉の戦争体験にある——そう話してくれたのは、妻の恵子さんだった（恵子さんは二〇一五年九月に逝去された）。

第一章

戦争の影を背負って

——一九四五年・沖繩戦と原爆

戦争体験という大きな傷痕

千葉一夫は一九二五年四月一九日、外交官の父・しんいち 葵一と母・美代子の長男として、日本で生まれた。葵一は間もなくヨーロッパに赴任した外交官であり、美代子は北里柴三郎の三女であった。すぐ下に二人の弟がいた。

一夫と両親の姿を写した最も古いと思われる一枚の写真が残されている。背の高い立派な紳士の父親と、美しい母親の間に挟まれて、就学前と思われる水兵姿の一夫が写っている。マドリッドで撮られたこの写真は、家族が最も幸せな時期を写したものだ。この後に勃発する戦争が、家族を永遠に引き離したからである。

戦争体験は、一夫の生涯に大きな傷痕を残した。

千葉一夫は、自分自身の戦争体験を職場の同僚や部下に語ることはほほなかつたという。しかし、妻の恵子さんだけには語っていた。子どもたちにも成人してから語るようになった。また、晩年、イギリスの雑誌に求められて書いた英語のエッセイに、その当時のことをわずかに書き記したものがあ



父・葵一と母・美代子。前列中央が一夫。1930年12月6日、マドリド旅行に際して撮影された家族写真

方針で、クールセル通りにあるハーベイズ・スクールという、イギリス人のインターナショナル・スクールで、英語で教育を受けた。一夫によれば、「君が大人になる頃には、フランス語ではなく英語が、国際言語になっている」と葵一に言われたからだという。一夫はこの時期に立派なキングス・イングリッシュを身につけた。この経験が、後年、外交官としてアメリカに対峙する際に大いに役立った。

この頃の一夫は、英語やフランス語はできても、むしろ日本語はほとんど読めない。帰国子女だった。葵一のフランスでの任務が終わり帰国する際、船の中で一夫は、日本に着くまでに読むようにと、当時の子ども向けの雑誌『少年倶楽部』を渡された。しかしそれをも、一時間かけて一頁読むほかなかったという。東京に戻ると、六本木にあった三河台小学校に通うが、日本語がよく分からず、ケンカばかりしていたという。

る(英語で書き、日本語として読まれない分、心情をかなり率直に記したものと思われる)。

そうした恵子さんや家族の証言、短い文章の中から、一夫の心が沖繩に向かつていくきつかけとなった戦争体験を描いていきたい。

帰国子女

一夫は、パリで小学校に入学する。葵一の